

自由論

——学生の自由から考えるバーリンとカント——

権 安理（コミュニティ政策学科教員）

I. はじめに

私の専門分野は、公共哲学あるいは社会哲学というものである。ざっくり言うと、広義の哲学者（古代のプラトン、近代のデカルト、現代のアーレント、現役のサンデル……）の書物を読むことを通じて、他者との共存や社会全般について考えることが仕事である。だが、哲学者の書物は総じて難解である。専門家が読んでも、内容の解釈で意見が分かれる。なので、哲学者の主張を授業で「わかりやすく」伝えようとする、その難解な主張のごく一部を示すに留まってしまう。私の実力不足と言えばそれまでだが、「それ以外にも伝えたいことはたくさんあるのだけれどなあ……」と思っているのも正直なところである。

ところで幸いにも、「まなびあい」は通常の学会とは違い、学生・卒業生・教員の交流を目的としている。そして、その学会誌である『まなびあい』には、論文とは異なるエッセイの募集があることに思い至り、この場をお借りして授業で伝え切れなかった哲学的なトピックについて書いてみようと考えた。テーマは、学生生活と不可分とも言える「自由」である。

II. 大学（生）と自由——なぜ自由論か

立教大学は「自由の学府」である。立教生の場合に限らず、社会人や小中高生と比べると学生が自由であることは、多くの人が認めるだろう。だが、この自由が意味することは何か。果たしてどのような状態が自由であるのか。しばしば自由は、「勝手気ままに振る舞えること」のように考えられる。少なくとも学生時代の私はそう思っていたし、現在でもそう考える学生は多いだろう。今も昔も学生は大学で得た自由に喜ぶ。

だが他方で学生は、しばしばこの自由を持って余し、それに対して戸惑っているようにも見える。小中高までの拘束の多い生活や、受験勉強の労苦から解放されて自由を得たものの、急激な環境の変化に困惑するのだろう。そして少なからぬ学生が「大学で何をしたら良いのか」と悩み、場合によっては、ある種の拘束を求めたりする。私の経験からすると、学生が「大学は自由で嬉しい」と言うのもよく聞かすが、「大

変だった高校時代が懐かしいし充実していたから戻りたい」という言葉もしばしば耳にする。

ではそもそも、この話題になっている自由とは何か。学生生活と切り離せない自由は、どのような状態を意味するのか。こうしてようやく本エッセイは、その主題にたどり着くことになる。以下では、二人の哲学者（バーリンとカント）の自由論をごく簡単に紹介する。なぜこの二人なのかと言えば、恐らくバーリンが、皆が暗に思っているであろう自由観を明確化しており、他方でカントの見解が、一般的に考えられるそれとは全く違う自由観を示しているからである。

Ⅲ. バーリンと自由——消極的自由と積極的自由

政治哲学の分野で知られるバーリン（ラトビア生まれのイギリス人：1909～1997）は、次のように言っている。

ふつうには、他人によって自分の活動が干渉されない程度に応じて、わたくしは自由だといわれる。…〔中略〕…もしわたくしが自分のしたいことを他人に妨げられれば、その程度にわたくしは自由でないわけだし、またもし自分のしたいことのできる範囲がある最小限度以上に他人によって狭められたならば、わたくしは強制されている、あるいはおそらく隷従させられている、ということが出来る（バーリン（1969）1971:p.304）。

これはバーリンが、彼の言う消極的自由を説明している部分である。消極的自由は積極的自由と対になっており、バーリンは、自由にはこの二種類があると考えた。まずは前者から説明しよう。

消極的自由は「拘束や干渉がない状態」のこと、言い換えれば「強制からの解放」を意味するが、より端的に「～からの自由」を意味すると考えると分かりやすい。先述の例を思い起こせば分かるように、大学は中高時代と比べると拘束・強制されることが少ない。中高生なら無断で一週間学校を休めばかなり問題になるのが、大学では必ずしもそうではなく、その状態を気づかれぬ可能性も高い。そもそも拘束されていない時間が多い。このような意味で、大学では消極的自由の度合いが高い。つまり学生時代は中高までと比べると、「学校からの自由」という側面が強く、したがって学生は学校から解放された時間を謳歌しつつも、他方で「何をしたら良いのか」と悩むのである。

そしてこの「何をしたら良いのか」という問いを發することこそが、積極的自由を求めている状態である。簡単に言えば積極的自由は、自らが望むことをやれる状態が確保され、かつその実現を目指す状態を意味する。つまり、それは能動的な自

己実現に関わるが、より端的に「～への自由」であると考えれば分かりやすい。(かつての私のように) 大学の自由を何となく享受して過ごしている人は消極的自由を謳歌していると言え、目標を見つけて努力している人は積極的自由に挑んでいるということになる。そして、学生生活を楽しみつつも「これで良いのか」と悩んでいる人は、積極的自由を行使する対象が見つからないことに対する不安を持っているということになる。逆に言うと、消極的自由が過分に与えられる状況下で、積極的自由をいかに実現していくのが、学生生活の課題ということになる。

Ⅳ. カントと自由——他律と自律

1. 自由と自律

カント（ドイツの“ザ哲学者”的人物：1724～1804）は、次のように言っている。

自然の必然性は、作用原因によって働く他律であった。全ての結果は、何か別のものが作用原因を規定してそれを原因性として成立させるという法則にしたがってのみ可能だったからである。だとすると意志の自由とは自律であること、すなわちみずから法則を与えるという意志の特性であるとしか考えられないではないか（カント（1785）2012:pp.186-7）。

カントにとって自由は自律、すなわち自らの意志のみにしたがって決断して行為することを意味する。自律は他律と対になっているが、端的に言えば、自律は自分の意志以外の何ものにも依存していない状態、他律は依存している状態を意味する。

例えば大教室の授業で眠くなる。ついつい眠ってしまう。中高だとほぼ確実に怒られるが、大学ではそうでない場合が少なくない（もちろん怒られる場合もある）。だから、「ああ大学は自由だ」と思ったとする。だがカントに言わせれば、この認識は間違っている。その学生はなぜ眠ったのか。それは、例えば「お腹がいっぱいだから眠くなった」のである。自らの意志ではなく、体の具合（自然の必然性）に従って寝たにすぎない。だからこの学生は、むしろ不自由で他律的である。これは善悪の問題ではない。授業中に眠ることが良いか悪いかを問うているのではなく、単に自由か否かを考えた場合、そう言えるということだ。

このような意味で、一般的に自由と解されている「勝手気ままに振る舞えること」は、むしろしばしば自由の対極にあるということになる。「お腹いっぱい→寝る」、「お腹が空いた→食べる」、「出席を取らない→サボる」……ということは、体調や状況に依存しているゆえに他律的であり、純粋な自由意志による決定ではない。ただしこのように言うと、一般的に考えられる悪いこと（サボったり寝たりすること）は自由ではないと断じているように見えるかもしれない。だがそれは違う。カントの

面白いところは、例えば「出席を取る→授業に出る」ということも他律であると考えられる点だ。これも純粋な意志に基づく行動ではない。出席点のために授業に出ているに過ぎないからだ。つまり自由であるためには、睡眠を誘う満腹のみならず、教員の意向や成績に依存したり左右されてはいけない。

2. 逆転の発想

そうであるとするならば、カントが言う意味での自由は、どのようなことを意味するのか。それは、他律的であってはならない、つまりは自らの意志とは別の要因に規定されてはならないものであった。だから、「〇〇のために××する」ということは全て自由ではない。授業に真面目に出て、ちゃんと授業を聞くことも、「〇〇のため」であってはならない。単位を取る→卒業できる→就職できる……から授業に出る・聞くのであっては、カントに言わせれば自由ではなく、他律的な行いである。では、授業に出てはいけないのか。そうではない。カント的に考えると次のようになる。「〇〇のために授業に出ている」のなら、〇〇の内容がどのようなものであれ、それは自由とは言えない。したがって、学生は自らの意志において、ただひたすら授業に出ると決めなければならない。

だが私たちの行為は、一見すると純粋に自分の意志からしたことだと思っても、ほとんどの場合、外在的要因に規定されている。カントが言う意味での自由は、実際にはあり得ないように見える。したがってここで、思わずカントを批判したくなるだろうし、批判するのは容易である。端的に言えば次のように思うのではなからうか。カントの言う自由なんてない！、理想論にすぎない！

実は興味深いことに、この批判は期せずしてカントの自由論の本質を浮かび上がらせている。カントは最初から理想論を語っているのだ。カント的な自由観からすれば、確かに実際には純粋な自由などないかのように見える。だが、それを意志すること、追い求めることはできる。実現の可否はともかく、私たちは自由でありたいと意志する。だからこそ、学生は積極的自由を求めて悩むのだろう。そうであるとするならば、その意志は、いったいどこからやってくるのか。

カントは次のように答えるだろう。たとえ実現していなくても自由の可能性があるからだ、と。可能性があるからこそ、自由を欲したいと意志することができる。実際には完全な自由などないかのように見る。だからそう考えて、勝手気ままな状態＝自由らしき状態を謳歌すれば良いのか。カントは、この点に思いもよらぬ角度から答えたと言える。確かに現実には自由はないように見える。だが私たちは、次のように問うことができる。いかなる条件の下であれば自由は可能であるのか、と。カントは、自由が可能となる条件を示したのである。つまり、実際に自由であるのか否か、が問題なのではない。いかなる条件の下でなら自由は可能であるのか、と

考えたのである。疑問文（自由はあるのか？）に対して正攻法でなく、仮定法の時制（もし自由があったら）で答えたというところであろうか。まさに逆転の発想である。自由であることは難しいかもしれないが、その可能性があるからこそ、自由を意志することができるのだ、と。

私たちは、つねに現実と可能性の間を生きており、実際には（現実の世界では）様々な制約や拘束を受けている。だが可能性（可能世界・理想の世界）があるからこそ、現実を超えること、現実とは異なることを意志し得るし、理想を求めることができる。

結びにかえて

このエッセイでは、バーリンとカントの自由論をごく簡単に紹介した。その理由は冒頭で述べたように、大学生活と切り離せない自由について考える哲学者の見解を紹介するためである。だが他方で、このエッセイは実は、自由について考えることを通じて哲学の方法を示すものであった。例えばバーリンの自由は、皆が暗に思っているであろうことを明確化して整理するものである。他方でカントの自由論は、皆が考えないであろう角度から自由について論じるものである。哲学の方法は、この二つに典型化し得る。一つは、何となく分かっていること、感じていることを明解に言語化して整理すること。もう一つは、誰もが考えつかないような観点から、そもそも論を語ること。このエッセイを通じて、学生が自由について哲学的に考え、また哲学的に考える方法それ自体の基礎を習得することの一助になれば幸いである。

【文献】

バーリン、アイザイア（1969）1971、小川晃一他訳『自由論』みすず書房
カント、イマニュエル（1785）2012、中山元訳『道徳形而上学の基礎づけ』光文社文庫